

ところが、先輩の第十四次兵を内地帰還させた翌十二月、今度は予想もしない我々第十五次兵の内地帰還の命令が出た。帰還した隊は、千葉県佐倉の本部六十四部隊（当時の近衛歩兵第五連隊留守隊）であった。ところが、残った隊員は、湘桂作戦、南部粵漢打通作戦に参加し、我が支那駐屯第一連隊の戦没者数は二、六二五柱、我が第九中隊一三三柱で、昭和十九年以降（私が帰った後）の戦没者は一〇六柱であるという。年次からみると第十六年次（大正十年生まれ）以降の方と、高年齢の補充兵の方々が当然多いのである。

帰国後の私は、家業が平和産業の洋服生地のお店で営業は閉鎖状態にあるため、大日本機械（軍需工場）に入社。昭和十九年十一月東部第三部隊に防衛召集になり、帝都空襲時芝増上寺前の「女子会館」を本部として警備にあたっていたのである。

我々の部隊は、埼玉県鴻巣市の常勝寺に歩観音像と軍馬の像を慰霊碑とし、戦友相集い戦没者のご冥福をお祈りしている。

想えば、私は北支で苦勞の連続であったが、湘桂作戦前の帰還であり、また幸か不幸か、幹部候補生になれなかったが、もし幹部候補生に合格し小・中隊長をしていたら、恐らく戦死か戦傷したであろう。ここにも軍隊は運隊であったことを痛感し、連隊の毎年挙行する靖国神社での慰霊祭に参加を心がけている。

勝部隊機関銃隊

山西・八路軍と戦う

山形県 山口一郎

大正十年二月六日生まれ、昭和十六年徴集兵として、昭和十六年七月に徴兵検査を受けましたが、第一乙種が多かった中で私は甲種合格となりました。当時家は農業でしたので、長男である私は当然父の手伝いをしていました。弟三人、妹三人に後を頼んで、昭和十七年二月、一緒に検査を受けたのは十人であったのに、私一人だけが盛岡の北部第六十二部隊に入営とい

うか集合したのでした。他の九人は地元の山形なのにといぶかりながらですが、これも命令のためと諦めていました。

私達は四、五両の夜行列車に乗せられました。窓には鑑戸が下ろされ、どこをどう通ったか全く判りません。

二月十九日、門司港から連絡船で朝鮮釜山へ上陸。列車で朝鮮を縦断、鮮満国境、満支国境と夢のうちに着いたところは、北支那山西省中部の汾陽という所でした。同年兵は二〇〇人くらいだと記憶しています。

部隊は独立混成第十六旅団ということでしたが、後に聞いたところ、昭和十七年三月に第六十九師団編成の命により、四月独立混成第十六旅団を基幹として師団が編成されたとのことでした。

私の部隊は旅団編成のときと同じ独立歩兵第八十二大隊でした。部隊は山西省離石附近の警備と討伐が任務でしたが、敵は蒋介石軍の山西軍と共産軍の八路军でした。北支での戦闘は大きな作戦から、小部隊です

る討伐もあり、相手も共産軍であったり山西軍であったりするので複雑でした。その蒋介石系、いわゆる国民政府軍と八路军はある時は協力したり、ある時は相反したりだったのでした。

軍隊手帳などにある軍歴によって私及び部隊の行動を申し述べてみます。

六月二十五日～二十六日 康寧堡警備

六月二十九日～七月三日 对晋襄陵西方地区の作戦
この時私は、重機関銃の射手でした。私は初めは一般小隊でしたが、その後重機関銃隊に入りました。この戦いが初陣でした。夜襲があり、軍装で出陣しましたが足もとに敵の弾丸が「ピン、ピン」と来ると、なげなく足をあげます。条件反射とでもいうのか、弾丸を避ける神経がそうさせるのでしょうか。私の隊の重機関銃隊から一人負傷者が出ました。重機は敵から一番狙われるのです。戦闘、作戦が終わって隊へ帰るのですが、兵舎は一般の民家を利用しており、各隊はそれぞれの部落の兵舎へ帰るのです。

一般の歩兵教育も内地のようなわけにはいかないの

で、戦いながら、警備勤務につきながら、教育、訓練を受けつつ、いわゆる一期が終了し、八月一日、陸軍一等兵に進級しました。九月十四日朝には南岩立附近の戦闘に出動し、夜、兵舎に帰ってきました。

大隊としては十月十日から十一月二十三日の間、秋季山西肅正作戦に参加とありますが、私は十二月二十五日から三十日までの間、昭和十七年の年末の作戦の体験を申し上げます。

第二次汾陽北方地区作戦です。我が部隊の駐屯地、警備地区北方地区の作戦です。我が軍の野砲弾で敵兵が沢山死んでいました。そこをかき分けるようにして飯盒炊きをしたのです。携帯口糧では我々若い盛りの者の腹の足しにならないからです。戦場で死骸のそばで飯を食べるなどは、内地にいたときには考えもありませんでした。戦地とはそのように神経が太くなるものなのです。

昭和十八年二月一口付で、一選抜の上等兵に進級しました。初年兵にとっては名譽なことですが、先輩や古参兵（中には札付きの万年古参兵もいる）をさしお

いての進級はなかなか大変なものです。軍隊は「めんこの数」といって、階級より年数の多い方が幅をきかせる社会であるからです。そのような苦しみも味わいながら、我慢をしながら、訓練、勤務、討伐と日々を送っていました。

四月五日から五月二十三日の間が各師団が出動した戦い、「十八春太行作戦」です。山西省南部の南部太行山内の重慶軍の掃討ですが、共産八路军とも戦ったようでした。重機関銃は駄載です。我々は弾薬馬に鍋等も積んで行きます。一般小銃隊は兵器、食糧、衣料、炊事用飯盒など一切を自分で持ったり担って行かねばなりません。我々駄馬部隊は馬に載せられたのです。

しかし、自分自身のことより馬の手入れで、水を飲ませ足や脚をさすり、足を冷すことを優先していかねばならぬし、空襲や砲撃を食うとさらに大変でした。私の家では牛を飼っていたので馬の扱いには慣れていました。私の家では牛を飼っていたので馬の扱いには慣れたが、商家の人やサラリーマンにとっては馬扱いに慣れるまでが苦勞であったでしょう。私の水のうの

水を自分で飲むとしたら馬に飲まれてしまったこともありました。馬が倒れたりして、重機関銃を分解して搬送したことも度々ありました。軍隊というところは楽があれば、どこかでいつかは苦しみが待っていません。

八路軍も勇敢で、ラッパを吹いて逆襲突撃をして来たこともあり、曹長が肩を撃たれ、敵が我々の近くまで来たこともありましたが、何故か急に退却して事なきを得たこともありました。重機関銃隊は小銃を持っていないので、手元に入られたら短剣で戦うより仕方がありません。

夜間になると重機関銃は陣地の一番前に出て、夜襲されたら「薙射」をする。敵を薙ぎ（な）げるように左右横に連続して撃つのです。そこへ後ろにいる一般歩兵（散兵）が突入し撃退するのです。重機の弾丸には二十発に何発かの曳光弾を入れてあると敵は恐ろしがりました。

重機関銃は各中隊に一個分隊ずつ配属されます。一個中隊四銃、一個小隊三銃ですから、四個分隊が四個

中隊にそれぞれ配属されることになります。また重機は敵にとつては恐い存在、日本の重機は姿勢が高いが命中率は抜群です。その反対に射手と弾薬装填手の四番の犠牲が多いのです。

山西省の我が軍の陣地が夜襲を受け、重機関銃を持っていかれたことがあります。夜襲ですので重機を出し、弾薬を取りに行った際に取られたことがあります。その射手は進級は遅れましたが、復員してから一生懸命にやって名誉を回復しました。しかし、その時の中隊長の進級は遅れてしまいました。何しろ宝とも言うべき兵器を取られたのですから、軍隊では仕方なかったでしょう。

昭和十八年九月二十二日から十一月二十日の二カ月間の「十八秋大岳地区作戦」は掃討作戦、悲惨な作戦でした。作戦中部落民はほとんど逃げてしまったのですが、いっどこから攻撃してくるか判りません。また、だれが本当の敵なのかも判りません。戦いとは、殺すか殺されるかの悲劇であると、つくづく思うこと

がありました。

昭和十八年十二月二十六日から昭和十九年一月五日までの冬期汾陽北方の討伐は、昭和十七年年末の同地区作戦のように激しい大きな作戦ではなかったのですが、雪の中での討伐戦で、戦果もないが犠牲もなしという戦いでした。その時は正月に遙か皇居を遙拝しました。太原の西古交鎮にいて、我が分隊が第二中隊に配属になったときです。

昭和十九年三月一日、部隊駐屯地汾陽を出発、十五日に河津着。河東道地区（黄河の東地区）の警備に就きました。この移動は後日の大作戦河南作戦（京漢線打通作戦）のためであったのだと、後日士官から聞きました。

その河南作戦に関連してか、六月十八日から二十日まで、稷山県特別収集掩護討伐に参加しました。

その時、他の隊のある小隊長が、私に「危ないから前に出るな」と声をかけ注意してくれたのですが、その少尉は鉄帽の下を撃たれ弾が鉄帽の中をぐるぐる回り、戦死されてしまいました。惜しい人を亡くしてし

まったものです。私は制止されて助かり、隊長は制止して戦死してしまつたのですから、軍隊は一寸先が闇であり、一寸違うことが生死を分けるのだと、今でもあの時の光景が目に残ります。

七月十一日、移駐のため河津出発、十八日河南省陝西省、同月同日より陝西省橋頭堡の守備を命ぜられました。硬い土でコンクリート状になっている所を掘って洞窟とし、四つくらい造って、各班はそこで生活をしていました。いわゆる、天然のトーチカのようなものでした。生活用の水は住民の井戸を使用しました。洞窟の中は夏でも涼しいものでした。

我が軍は警備のため占領していました。その間に小銃隊では戦死者が出ましたが、重機関銃隊では犠牲は少なく済みました。大きな戦闘になると重機関銃は狙われます。射撃をしている時、自分のそばに随分弾が来たことはありませんが、「ヒュー」という流れ弾は恐くはありません。河南作戦の時は、我々重機関銃はあまり撃ちませんでした。撃つより行軍が多かったので、駄馬のいる重機関銃隊は行軍中は一般小銃隊より

は楽でした。しかし、先ほども申したとおりの面倒は大変です。休憩時には、銃を下ろし、弾薬箱を下ろし、足をマッサージしたり、鞍傷がないようにしたりなかなか兵隊は休む暇がありません。行軍中より休憩のときの方が忙しいのです。

昭和二十年二月十九日より二十七日、第五分区、延安匪二月肅正討伐がありました。共産党との戦いです。八路军はこちらの兵力が少ないと攻撃してきましたが、強いとなると逃げてしまいます。神出鬼没ということでしょうか、地の利を上手に使うし、住民から情報を得るのですから、山西軍より始末が悪いというか、ゲリラ戦も上手であったようです。

四月一日、転進のため陝東出発、浦口通過は二十二日、その間は列車輸送でした。空襲は運城附近でP38によるものが一回ありましたが被害はありませんでした。二十三日、江蘇省嘉定県嘉定着。滬海道附近の警備を一カ月くらいしました。作戦中の梱包監視を各隊から二人くらい出し、荷物の間で寝ていましたが、その間、敵か住民か判りませんが荷物を盗まれました。

た。他隊も同様に盗られたということです。そのために進級が遅れたという人もいたと聞きます。

北支から中支へと移動し、上海附近で終戦となりました。即ち、八月十四日、停戦詔書発令。八月十八日、復員下令。九月二日、停戦協定締結。

昭和二十一年一月、病院から衣服を借りたりして演劇をしたりしていましたが、一月十日、急遽内地帰還のためLSTで上海港出発。一月十三日、佐世保港上陸、部隊全部が一緒に帰ることができました。

復員時、善行証書が付与され、同日除隊となりました。軍歴を計算すると十一年九カ月で恩給に三カ月足らぬということ、これも運隊でありました。